〈幼稚園教育〉

幼児の好奇心や探究心の芽生えをはぐくむための保育の工夫
～学級の仲間との活動・かかわりを通して～

うるま市立中原幼稚園教諭　池 原　昌 子

Ⅰ　テーマの設定理由

近年，生活様式の変化や価値観の多様化など幼児を取り巻く環境がめまぐるしく変化している。そのため，興味･関心の幅が広い反面，基本的な生活習慣の欠如，コミュニケーション能力の不足，小学校への不適応，学びに対する意欲・関心の低下等，子どもたちの育ちに変化が見られるようになった。

そのような環境の変化の中で，共に人々の心の豊かさが求められてくるようになり，平成２０年中央教育審議会答申では，これからの幼稚園教育の在りかたとして「生きる力の基礎」を培うことが重視されている。

幼児は，身体感覚を伴う多様な活動を経験することによって，豊かな感性が育つとともに，生涯にわたる学習意欲や学習態度の基礎となる好奇心や探究心が培われ，また，小学校以降における教科の内容等について実感を伴って深く理解できることにつながる「学びの芽生え」をはぐくむといわれている。(平成１７年１月中央教育審議会答申)

幼稚園教育要領では，「幼児が遊びを通して学ぶことの楽しさを知り，積極的に物事にかかわろうとする気持ちを持つようになる過程こそ，小学校以降の学習意欲へとつながり，さらには社会にでてからも物事に積極的に取り組み，自ら考え，様々な問題に積極的に対応し，解決していくようになっていく。」と示されている。このことから，多様な経験をし，様々なことに興味や関心を広げ，それらに自らかかわろうとする気持ちをもつことは，幼児期からはぐくむことが重要であると考える。

また，幼児期における教育は「幼児期の特性を踏まえ，環境を通して行うものである。」とあり，「教師は，幼児がこれらの環境にかかわり，豊かな体験ができるよう，意図的・計画的に環境を構成することが大切である。」と述べられ，教師の担う役割が強調されている。

本学級の幼児は，進んで身近な自然や生き物にかかわる子もいるが，あまり興味を示さず，身近な自然環境や自然事象への気づきが弱い子，生き物に対してかかわり方が分からない子，生き物への興味･関心が弱い子も見られる。

また，家庭や地域の環境を見ても公園や自然の少ない環境にあり，自然とのふれ合いが少なく，外で遊べない幼児も増えつつあるため，幼児の体験は，直接体験が弱く，間接体験が中心になっている。そのため，幼児の経験の偏りが見られ，園生活の中でも経験の差が見られる。

これまで，その課題解決のために，その時期に応じた季節感のある遊びを取り入れたり，遊びの中で幼児の気付きや発見を受け止めかかわってきた。しかし，幼児の実態を捉え、一人一人が興味・関心をもてるような手立てや，好奇心や探究心を深め学級全体の育ちにつなげていけるような意図的・計画的な環境の構成が不十分だったことに気付いた。

そこで，本研究においては，幼児が楽しみにしている園行事「秋の遠足」を取り上げ，遠足を迎えるまでの過程や当日の学級の仲間との活動・かかわりを通して，好奇心や探究心の芽生えをはぐくんでいきたいと考え，本テーマを設定した。

Ⅱ　研究目標

学級の仲間との活動・かかわりを通して，好奇心や探究心を育てるための指導，援助のあり方を探る。

Ⅲ　研究仮説

1　基本仮説

学級での活動の中で，幼児の興味や関心に即した活動を取り入れ，環境構成・援助を工夫することで，好奇心や探究心をはぐくむことができるであろう。

2　具体仮説

(1) 園行事の教育的な意義を明確にし，行事に向け学級の仲間と活動を展開していく中で，共通の経験によって相互に影響し合い育ち合い，好奇心や探究心をはぐくむきっかけとなるであろう。

(2) 教師が幼児期の特性を踏まえ，意図的，計画的に「見て・触れて・やってみたくなる」環境を構成することによって，積極的に物事にかかわろうとする気持ちをもつことができるであろう。

Ⅳ 研究の全体構想図

今日的教育課題
- 基本的生活習慣の欠如
- 運動能力の低下
- コミュニケーション力の不足
- 小学校への不適応，学びに対する意欲・関心の低下

幼児の実態
- ○動物に興味や関心をもっている子が多い
- ○沖縄の絶滅危惧種や地球環境問題について関心をもっている子が多い
- △身近な自然環境や自然事象への気づきが弱い
- △経験の偏りが見られる

目指す幼児像
- ○いろいろな事に興味や関心をもち，おもしろさを感じることができる子
- ○根気強く取り組んだり，工夫したり，見通しをもつことができる子

研究テーマ
幼児の好奇心や探究心の芽生えをはぐくむための保育の工夫
～学級の仲間との活動・かかわりを通して～

研究仮説
学級での活動・かかわりの中で，幼児の興味や関心に即した活動を取り入れ，環境構成・援助を工夫することによって，好奇心や探究心がはぐくまれていくであろう。

具体仮説（1）
園行事の教育的な意義を明確にし，行事に向け学級の仲間と活動を展開していく中で，共通の経験によって相互に影響し合い育ち合い，好奇心や探究心をはぐくむきっかけとなるであろう。

具体仮説（2）
教師が幼児期の特性を踏まえ,意図的,計画的に「見て・触れて・やってみたくなる」環境を構成することによって,積極的に物事にかかわろうとする気持ちをもつことができるであろう。

本研究の進め方のイメージ

好奇心や探究心をはぐくむ　**学びの芽生えをはぐくむ**

教師の援助
- 幼児のつぶやきを聞く
- 幼児の関心のありかを捉える
- 幼児を環境へつなげる
- 一緒になってやってみる
- 幼児の気付きに共感する
- 遊びの見通しをもつ
- 遊びを「広げる」「深める」という視点をもつ
- 感動体験ができるような援助の工夫
- 一人一人の感動体験をつなぐ
- 学びの芽生えへつながる遊びの工夫
- 自分たちでやったかのような仕掛けをする

もっと！！さらに！！ ＜発展・意欲・挑戦＞	遊びの中で・・・
なるほど！！そうだ！！ ＜気づき・喜び・共感・納得＞	動物園への遠足
やってみよう！！ ＜試す・工夫・調べる＞	遊び・製作 リズム・ゲーム
なんだろう？どうしてかな？ ＜興味・関心・疑問＞	読み聞かせ 話し合い
教師のゆさぶり ＜意図的・計画的な環境構成＞	遠足についての話題提供

環境構成
心が動く感動体験や，見て・触れて・やってみたくなる環境
- 教師や仲間から「自分は認められている」という安心感を抱ける環境。
- 興味や欲求に応じた教材・教具・素材の用意
- 試行錯誤できる時間や場の確保
- 自らの生活経験が遊びに活かせる環境
- 遊びの連続を大事にした行事への取り組み

遊びと活動

Ⅴ　研究内容

1　幼児の好奇心や探究心の理解

(1) 幼児期の好奇心・探究心

幼児の好奇心とは，園生活のすべての環境や未知の世界との出会いに対して「なんだろう」「おもしろいな」などと心を動かしかかわっていき，さらに「もっと～したい」「あれは何かな」といろいろなことに興味・関心を抱く心の動きである。また，幼児にとって，目，耳，鼻，口，手，体全体，諸感覚を通じて出会うことすべてが，興味・関心の対象となり，他の幼児や教師などと感動を共有したり，共にその対象に関わって活動を展開したりすることによって広げられ，高められていく。

幼児の探究心とは，好奇心を抱いたものに対してより深い興味を抱き，「～するためにはどうしたらいいだろう」「どうしたらうまくいくだろう」と試行錯誤することによって，その事象に対して深い知識を得たり，原因を解明したりしようとする気持ちと捉えた。

本研究においては，幼児期の好奇心や探究心は，幼児が身のまわりの環境へかかわりをもつ入り口であり，小学校以降の生活や学習の基盤となって幼児一人一人の「生きる力」の基礎を培うものと考える。

(2) 好奇心や探究心をはぐくむために

幼児が本来もっている好奇心や探究心をはぐくむために，以下の三つのことを大切にしていきたい。

① 影響を与える友だち・教師
- 友だちや教師がやっていることを自分もやってみたいと思う。
- 友だちや教師と感動を共有し，ともにかかわりともに考えることで興味・関心が広がり，深まる。

② 刺激となり対象となる事物や現象
- 幼児にふさわしい自然・物・遊具・素材等があること。

③ ゆったりとした時間
- 時間をかけ，自分のペースで，好きなだけ，何度でも繰り返しかかわれること。
- 満足感が得られることで，さらに興味や関心の広がりや深まりがでてくる。

このことから，好奇心や探究心をはぐくむためには，人とかかわる力を育てること，ふさわしい環境を整えること，教師が自ら考え工夫して子どもにかかわることなどが大切だといえる。

(3) 好奇心や探究心の芽生えをはぐくむ環境構成と教師の手立て

無藤隆（2000）は，「幼児が驚き，興味をもち，不思議だと思ったり，おもしろいと感じてもっと見てみたい・やってみたいと思ったりすることは，特に幼児の知的働きを刺激する。このような驚異の念を誘うものは，本当は幼児の身の回りの環境に満ちているはずである。」と述べている。

幼児は大人と違ってそういう環境に敏感ではない。そこで，教師はふだんぼんやりとあたりまえのこととして見逃している不思議さに，幼児を近づけたり，遊びやそのほかの活動を刺激したりする必要があると考える。

また，幼児が身近な環境にある様々なものに対して積極的にかかわろうとする態度は，身近な事物や出来事，自然などに対して幼児が思わず感動を覚え，もっとかかわりたいと思う経験をすることから生まれる。このような感動を周りの友だちに伝え合い，共感し合うことなどを通してさらに意欲が高まっていく。

そこで，教師が幼児の世界を広げ，驚異の念をかきたてる手立てを講じることや，共に学びそれぞれに育ち合えるような環境をつくっていくことが幼児の好奇心や探究心の芽生えにとって大切であると考える。

図１　好奇心探究心の芽生えを育む教師の手立て

2 「環境」について

幼稚園教育要領解説では，「幼児にとっての生活である遊びとのつながりのなかで，環境の一つ一つが幼児にとってもつ意味が広がる。したがって，まず何より環境に対して，親しみ，興味をもって積極的にかかわるようにすることが大切である。」と示されている。

また，［内容］の解説に「幼児が自然と出会い，感動するような体験は，自然に対する畏敬の念，親しみ，愛情などを育てるばかりでなく，科学的な見方や考え方の芽生えを培う上で基礎となるものである。」と述べられている。

以上のことから，ただ単に環境の中にあるものを利用するだけではなく，そこで気付いたり，発見したりしようとする環境にかかわる態度を育てることが大切であると考える。

さらに，ビデオやテレビなどを通して間接体験の機会が増えている現状で，教師には，幼児がいろいろな環境にかかわり，できるだけ直接体験ができるよう，意図的・計画的に環境を構成することが求められている。

西久保礼造(1997)は，「環境は幼稚園の施設，設備，園具，遊具，用具，材料だけではなく，幼児が身近に接する自然や社会環境などを含めた事物・現象や保育者をはじめとした幼児に接する人々，更にそれらがかもしだす雰囲気，時間，空間など，幼児を取り巻く状況のすべてを指す。」と述べている。

また，環境の構成については，「幼稚園の教育は環境を通して行われるという特質をもっている。したがって，設定されたねらいを達成するために環境の構成をし，幼児の活動を誘い出すことになるので，教師はどのような環境を用意するかということが重要な課題となる。」「環境の構成とは幼稚園の施設，設備，遊具，用具，材料などや身近な自然や社会の事象などの環境と，幼児の生活にかかわりをもつ教師などの大人や幼児集団という環境を，幼稚園教育の目標達成に向けて一つのまとまりのある形に組み立てていくことを意味している。」と述べている。

このことから，幼稚園においては，学校教育法第２３条における幼稚園教育の目標を達成するために必要な環境を構成し、その中で幼児が幼児期にふさわしい生活を営むようにすることが大切であると考える。

3 教師の役割について

(1) 適切な援助

幼稚園教育要領「環境」の領域の中で，「教師は，環境の中にあるそれぞれのものの特性を生かし，その環境から幼児の興味や関心を引き出すことができるような状況をつくらなければならい。」と示されている。

また，「教師は，幼児が自分なりに環境にかかわる姿を大切にするとともに，場やものの配置を工夫したり，教師も一緒にやってみたりして，幼児が互いの考えに触れることができるような環境を構成することが大切である。」とも述べられている。

後藤節美(2008)は，「幼児が環境にかかわって興味や関心をもちながら生み出していく活動を豊かにしていく支えや，その中で一人一人の体験が幼児の成長・発達を促すようにする教師の保育活動を総称して援助という。」と述べている。

このことから，教師は，理解者，共同作業者など様々な役割を果たし、幼児の発達に必要な豊かな体験が得られるよう，活動の場面に応じて，適切な援助を行うようにすることが大切であると考える。

(2) 意図的・計画的な環境の構成

幼稚園教育要領「環境」の領域の中に，「幼児が，遊びの中で周囲の環境とかかわり，次第に周囲の世界に好奇心を抱き，その意味や操作の仕方に関心をもち，物事の法則性に気付き，自分なりに考えることができるようになる過程を大切にすること。特に，幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい，自ら考えようとする気持ちが育つようにすること。」とある。

上村一彦(2003)は，「一人一人の幼児のなかに今何を育てたいのか，どのような経験を必要としているのかを明確にして，教師としての願いを環境のなかに盛り込むこと。」と述べている。

このことから，教師は幼児の興味や関心を引き出し活動の幅を広げていけるよう意図的・計画的に環境を構成していく必要があると考える。

そこで「教師の役割」を図２のようにまとめた。

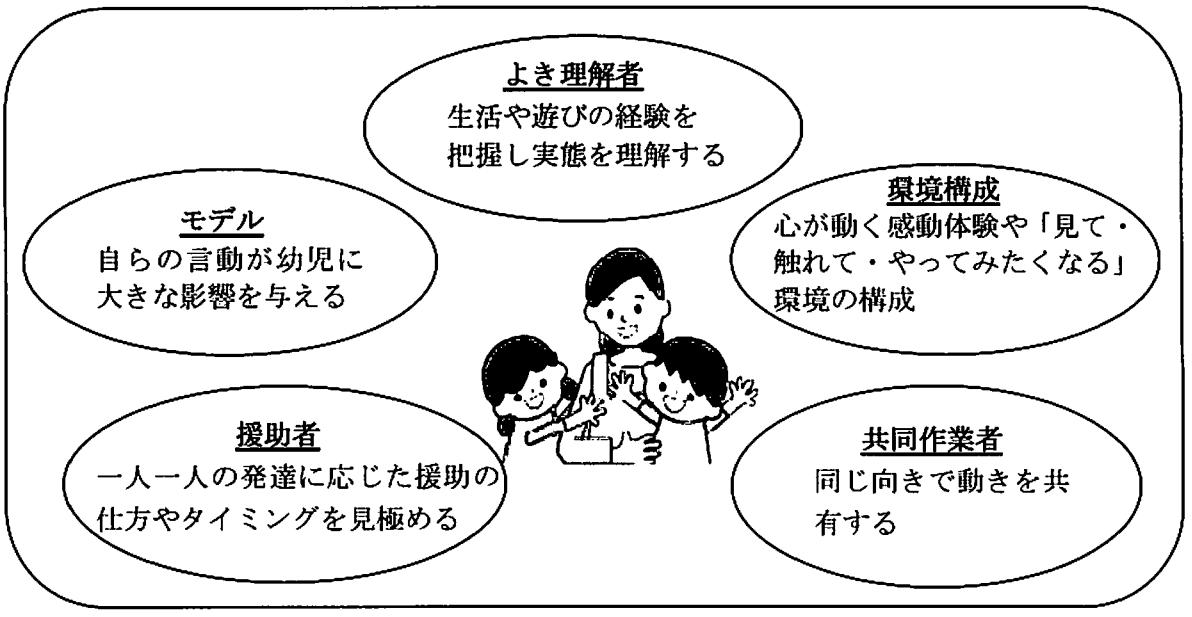

図２　教師の役割

以上のことから，教師は多角的な視点から幼児の姿を捉え，幼児一人一人の特性や発達の課題を把握し，目の前で起こっている出来事から，そのことが幼児にとってどのような意味をもつかをとらえる力を養う必要がある。教師は幼児と心を通わせながら，望ましい方向に向かって幼児自ら活動を選択していくことができるよう，きめ細かな援助をすることが大切である。

4　学級について

幼稚園教育における「学級」について，「保育実践用語辞典」（西久保1997）より，以下のようにまとめてみた。

(1) 学級全体の共通経験

幼稚園教育の特色の一つは，活動の選択を幼児にまかせた自由な指導形態で指導が行われるところにある。しかし，学級としては幼児の経験の偏りをうめるとともに，技能を伴う活動を適切に積み上げていくために，学級全体の幼児に同じ活動をさせることによって，共通な経験をさせることが必要となる。しかし、学級全体の共通経験といっても，一斉の形態で指導することだけを意味しているわけではない。自由な形態の中で、一定の期間内に同じ活動をさせたり、やがてその活動が学級全体の幼児に波及していくことを期待して，学級の部分的な幼児にある活動を指導したりする方法もあると述べている。

(2) 幼稚園における一斉の形態

一斉の形態とは，あるねらいを達成しようとするときに学級全体の幼児に，同時に共通な経験を与えることが必要な場合に用いられる。

教師が，この形態で指導するのは，幼児の生活が学級集団を単位としておこなわれるからで，その学級集団の機能を生かすとともに，集団生活をスムーズに展開していくために，この形態による保育が必要となる。

① 指導のねらい
- 教師の意図を伝達したり，活動の方向づけをしたり，生活をスムーズに展開させる。
- 学級の幼児が一緒に過ごすことを楽しむ活動を通して，学級意識や学級としてのまとまりを育てる。
- 幼児の経験の偏りをうめることによって活動の幅を広げる。

② 活動の展開の仕方
- この形態で指導する必要がある経験や活動を１日の流れの中で取り上げて指導する。
- 日常の活動の流れを打ち切って，年間計画に位置づけられている行事的な経験や活動を一斉の形態で指導すると述べている。

以上のことから，学級での集団活動を通して，幼児は相互に影響し合い，育ち合っていくことがわかる。そこで教師には幼児一人一人のよさが生かされる学級集団のあり方を考えることが求められている。

5　園行事について

(1) 園行事の教育的意義

西久保(1997)は，「行事とは，ねらいによって，あらかじめ計画した日時に非日常的に特別な経験を組織し，保育効果を高める活動である。」と述べている。

園行事の種類には，次のようなものがある(図３)。

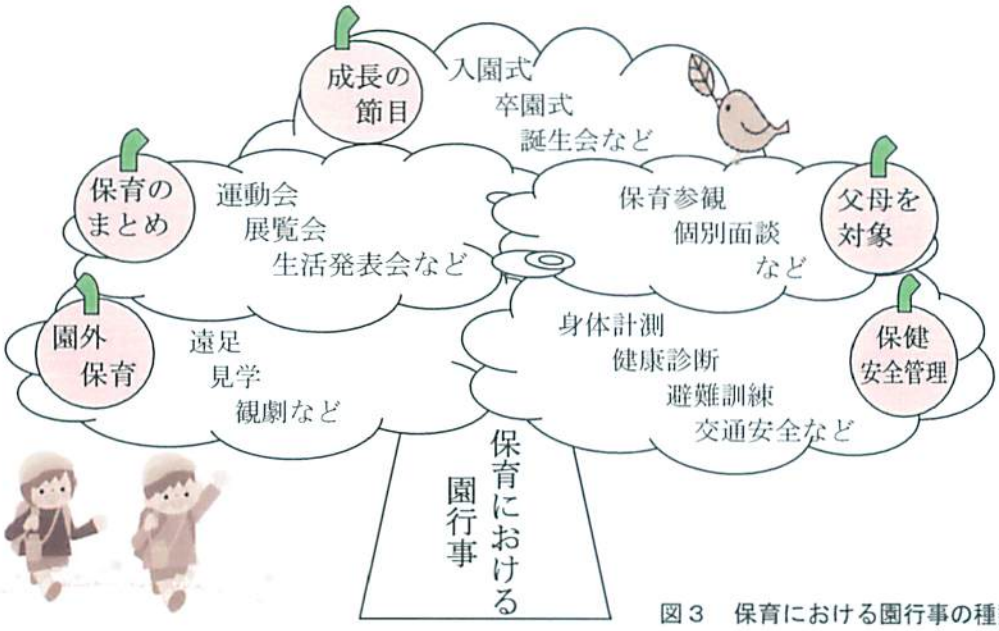

図３　保育における園行事の種類

この園行事の基本的な計画は教師が立案するが，行事への取り組ませ方についてはできる限り幼児の自主的な取り組みを可能にするように配慮することが大切である。つまり，これらの園行事を幼児たちが乗り越えることによって，一段と飛躍するような計画であり，指導でなければならない。それには，それぞれの園行事の教育的意義を明確にし，それを「期のねらい」達成にどのような意味づけで指導するかが重要な問題となる。

(2) 遠足の意義

幼稚園では，年間４～５回の遠足を園行事として実施しており，幼児が楽しみにしているものの一つである。幼児は実際にものを見聞きし，さわり扱うことで，それがイメージとして内在し，先行経験としていきてくることになる。したがって，幼稚園では，幼児が経験できない活動や，経験の偏りが生じやすい活動を園外で体験させることが必要となる。その意味で，自然に恵まれた公園，動物園，植物園，いもほりなどへの遠足は，そのとき利用する交通機関とともに，自然の事象への興味や関心をもつようになる共通経験となる。また，このことは，遠足が新しい活動への導入や，学級全体またはグループの課題活動への導入としての意味をもつことになるので，どのように遠足を活用するかを十分に検討したうえで実施する必要がある（「保育実践用語辞典」（西久保1997）より)。

(3) 動物園の社会的役割

うるま市のほとんどの幼稚園では，２学期に「沖縄こどもの国」への秋の遠足を実施している。生きた動物たちを展示する動物園には何らかの教育的意図があるのではないかと考えられる。

そこで，動物園の社会的役割について調べてみた。

① 娯楽の場（レクリエーション）・・・余暇を楽しく過ごす，家族団らん，動物を見て楽しむなど
② 教育の場・・・動物について知る，命の大切さを知る，動物と人間を取り巻く環境について考え関心をもつきっかけを提供するなど
③ 調査研究の場・・・動物学，獣医学，展示学などの研究活動など
④ 自然保護の場・・・種の保存，希少動物の保護と繁殖など

以上のことから，幼稚園で保育効果を高める活動である行事「動物園への秋の遠足」は，地域の資源を生かし，動物園での遊びをどう幼児の育ちにつなげていくか，また，その場所でしか得られないあるいは得にくい育ちとは何かを抽出し，それらの育ちを確かなものにするよう取り組んで行くことが大切であると考える。

Ⅵ 指導の実際

1 検証保育までの取り組み

１学期からこれまで，色々なことに興味・関心を持って欲しいという教師の願いから，朝のひとときの「きらきらタイム」や学級でのひとときの「わくわくタイム」の中で，幼児の生活に関係の深い情報や社会の出来事などを，様々な情報の中から選択し伝えたり(表１参照)，幼児の興味・関心に即した活動を意図的・計画的に取り入れた。以下，その実践を踏まえてた保育で検証していく。

表１ 教師の意図的な情報発信 （今年度の実践事例から）

	研修会・新聞記事・テレビ・ラジオなどの情報より	知らせたいこと	幼児の姿
4月	・東日本大震災１ヶ月後の様子について(新聞記事より)	・がんばっている人がたくさんいる ・まだ困っている人がたくさんいる	・「自分たちも手伝いにいきたい」と，自分たちにできることはないか考えていた。
5月	・やんばるの絶滅危惧種について（幼稚園定期総会講演会より）	・やんばるの森の現状 ・命の大切さ ・ぼくたち・わたしたちにできることは？	・「ヤンバルクイナとケナガネズミかわいそうだね」と心痛める姿が見られた。
6月	・環境月間 地球温暖化について (新聞記事，テレビ等)	・地球温暖化が進んでいる。	・自分たちが地球を守ろうと意気込む姿が見られ，できることから始めようと，牛乳パックのリサイクルが始まった。
7月	・「ヤンバルクイナ」「ケナガネズミ」非常事態について（新聞記事より）	・動物たちがすんでいる森に人間が入ってきたために事故がおき，動物たちが減少してきている。 ・共存することの大切さ	・新聞記事の写真を見ながら「人間が勝手に道を作るからだよね」「みんなで森を守らないと」などと，友だちと話している。 ・家庭から新聞記事を切り抜いて持ってくるようになった。
9月	・エクレア似のなまこ発見 (新聞記事より) ・９／１７はヤンバルクイナの日について (新聞記事より)	・沖縄(身近な環境)にもまだまだ未知の生物が多くいる ・世界で沖縄にしかいない貴重な鳥「ヤンバルクイナ」が生存している沖縄に住んでいることを誇りに思ってほしい	・なまこ発見に感動している。 「美ら海水族館に行くとき色々なナマコ見てこよう」と期待している。 ・「本物のヤンバルクイナ見てみたい」「どんなもの食べるのかな」「本当に飛べないのかな」などと，興味・関心を示している
10月	・美里幼稚園の園児が全員竹馬にのれたことを絵本にした(新聞記事より) ・沖縄こどもの国のコアラが昨年１１月に死亡 (遠足下見で知った情報をインターネットで検索	・諦めないで竹馬の練習を頑張ったので，１１８名全員が竹馬にのることができた。 ・沖縄のみんなのために頑張って長生きしてくれたこと。命の大切さについて	・「自分たちも頑張ろう」と張り合いが出て，友だちを誘い竹馬の練習をする姿が見られる。また，「全員のれたら絵本作りたいね」と期待している。 ・「動物園に行ったらコアラにうーとーとーしようか」と，友だちと相談している。
11月	・国内最長のハブ発見 (新聞記事より) ・ヤンバルクイナとケナガネズミの事故最多 (新聞記事より)	・なぜここまで大きくなったのか？ ・２メートル４２センチはどれくらいの長さ？ ・ハブは人間の生活圏で生息しているので気をつけることがある。 ・やんばるの動物たちを守る為に村民とやんばる野生生物保護センターの皆さんが日々頑張っている。	・実際のハブと同じ長さの紐で，色々な物と長さ比べをしている。 ・図鑑コーナーでヘビのページを開いて友だちとヘビについて話している。 ・「こどもの国にもヤンバルクイナとケナガネズミがいたらいいな」と期待している。 ・１組のみんなでやんばるの生き物を守りたいと意気込んでいる。 ・「発表会で地球を守る劇をしてみんなに知らせたい」と劇作りを始めた。

【考察】

日々の学級での活動の中で，教師が幼児の生活に関係の深い情報を選択し発信したことで，遊びや学級での取り組みの中で様々なことに興味や関心を持つようになってきた。
そこで，どの幼児も期待し楽しみにするであろう「秋の遠足」を取り上げ，好奇心・探究心の芽生えを育むきっかけづくりができるよう，遠足を迎えるまでの活動や当日の動物園での活動を意図的・計画的に展開していきたい。

また，学級全体の育ちの高まりにつなげていけるよう学級での取り組みとし，今後の保育実践につなげたい。

図４　１１月の情報発信からの活動

図５　６月の情報発信からの「リサイクル活動開始」

2 保育実践

具体仮説(1)(2)の検証
(1) 園行事の教育的な意義を明確にし，行事に向け学級の仲間と活動を展開していく中で，共通の経験によって相互に影響し合い育ち合い，好奇心や探究心をはぐくむきっかけとなるであろう。
(2) 教師が幼児期の特性を踏まえ，意図的、計画的に「見て・触れて・やってみたくなる」環境を構成することによって、積極的に物事にかかわろうとする気持ちをもつようになるであろう。

まず，遠足に向けてこれからの活動に興味・関心をもち，意識して取り組めるよう，遠足について環境構成を以下のようにおこなった。

(1) 保育実践前の環境構成

小学校校庭～校舎周辺への散歩中,「秋の葉っぱがあった～」と落ち葉探しを始めたことをきっかけに，季節の移り変わりについて興味を示し始めた。拾ってきた葉っぱを壁に貼り付ける子，枝や葉っぱを組み合わせていろいろな形を作る子など教室内の環境も「秋」の装が始まった。

そこで，幼児のイメージする「秋」って何だろう？と疑問に思い，「秋」について話し合い活動をおこなった。今後予定している秋の遠足についての情報を盛り込んでいき，遠足に向けての活動に興味・関心をもち，意識して取り組めるよう，以下の質問をした。

①「遠足でどうしてこどもの国へ行きたいの？」

「秋だから」「すずしいから」「景色を見たいから」
「みんなでうきうきしたいから」「動物を見たいから」
「動物を見てすごいね～って言いたいから」

②「動物園にはどんな動物がいるかな？」

「ライオン」「クマ」「きりん」「ぞう」「オオアリクイ」「マンドリル」「ウサギ」「ヒージャー」・・・等

③「動物園にはどうしていろいろな動物が集められているのかな？」

「どんな動物がいるのかな～って見て欲しいから」
「声を聞いて欲しいから」「調べて欲しいから」

その他・・・
「動物は本当は自分の国に帰りたいはず・・・でも，みんなに見て欲しいから頑張っているんだよ・・・だから遠足のときほめてあげる。」

動物園の動物は人間に「見て欲しい・声を聞いて欲しい・調べて欲しいという願いを持っている。」という幼児の声を今回の活動に生かし，遠足を迎えるまでの活動と当日の活動を通して，好奇心･探究心の芽生えをはぐくむきっかけづくりになるよう意図的・計画的に活動を展開していく。

(2) 保育実践計画

仮説を検証するために，以下の保育計画で研究実践を行った。

	月日	保育内容	ねらい	･環境構成　＊教師の援助
保育実践1	10/25	○遠足について話し合う ○絵本や図鑑を見る ・動物クイズ ・鳴き声クイズ ・足跡クイズ	◎自分の思いや考えを伝えたり，友だちの思いや考えを聞く。 ◎動物について興味・関心をもつ。 ◎遠足へ期待をもつ。	P10 参照
保育実践2	10/28	○絵本「できるかな」を見る ○リズム遊び ○ゲーム遊び	◎動物の動きのおもしろさや，身体の特徴に気づき表現することを楽しむ。 ◎友だちとのふれあいを楽しむ。	＊動物の特徴に興味・関心がもてるような内容のリズムやゲームを準備し，幼児が気付いたことを認め，共感し，他の幼児にも伝えていく。
保育実践3	10/31	○製作活動 動物ちぎり絵（グループで一つの作品を製作する） ＊グループで話し合い，遠足当日観察したい動物を決める。決定した動物について知りたいことを２あげる。	◎動物に対して興味・関心を高める。 ◎グループの友だちと相談したり，協力したりすることを通して仲間意識を高める。	・グループで相談しながら製作を進めることができるように環境を整え，描こう思った動物を図鑑や絵本などで調べられるようにする。 ＊製作を進めていく中で幼児が気づいたことを認め、共感できる言葉かけをする。 ＊当日興味･関心をもって観察することができるよう，観察したい動物の特徴に気づけるような言葉かけをする。
保育実践4	11/1	○話し合い活動 ○地図を使用しての作戦会議 （グループごと）	◎遠足への期待を高める。 ◎集団行動でのルールの必要性に気づく。 ◎友だちを思いやる気持ちをもつ。	＊グループでの作戦会議の中で，幼児が気づいたこと考えたことを認め，共感し，他の子への刺激になるよう伝えていく。 ＊グループの友だちと地図へ色を塗ったり，書き込みをしながら遠足への期待を高めていけるよう援助する。
保育実践5	検証 保育 11/2	○秋の遠足 遠足へ行こう	◎動物園への遠足を通して，本物に触れたり，見たりする中で，動物への興味・関心を広げる。 ◎集団行動の決まりを守り，友だちを思いやる気持ちをもつ。	P14 参照
保育実践6	11/4	○遠足で実際に見た動物を表現する。(絵・粘土・空き箱製作など) ～実践報告省略～	◎遠足で見た動物を表現することを通して，さらに動物の特徴に気付く。	・遠足当日の写真を提示し，楽しかったことを思いだすことができるようにする。 ＊戸惑っている子にはイメージしやすいように言葉をかけたり，図鑑を提示したりする。

保育実践１

(1) 日　時　　平成２３年１０月２５日(火)
(2) ねらい　　◎自分の思いや考えを伝えたり，友だちの思いや考えを聞く
◎動物について興味・関心をもつ
◎遠足へ期待をもつ

(3) 活動仮説　○遠足について話し合い活動をし，動物図鑑や絵本を見ることで，動物の特徴についていろいろなことがわかり，動物について興味･関心をもつであろう。

(4) 主な活動の流れ（興味･関心 → 疑問 → 確認･調べる → 納得）

実際の幼児の姿	○環境構成　＊教師の援助
○動物の特徴が示された図鑑に興味を持ち思い思いの姿で見ている。また，鳴き声クイズに張り切って答える姿が見られる。 興味・関心 ・動物の動きを真似しながら ・前のめりになって ・「○○見たことあるよ」と友だちと会話をしながら ・動物の特徴を探そうと目の周りが赤くなるほど必死に ・じっと耳をすませて	＊読み聞かせの工夫 ・動物の特徴に気付いたり，動物の不思議を感じられるような図鑑や絵本を選択する。 ・友だちの思いや考えに興味･関心をもって聞くことができるよう，子ども達同士の思いや考えをつなぐ。 ・耳でも動物の特徴が分かるよう動物の実際の鳴き声テープを活用する。
○図鑑を見ながら出て来た疑問 疑問 ・「ライオンは何で強いのかな？」 ・「なんでゾウの足の裏って前と後ろで形が違うのかな？」 ・「ゾウはどうやって起き上がるのかな？」 ・「キリンとかゾウとか，体重何キロかな？」 ・「キリンの身長どれくらいかな？」 ・「ライオンの鼻はどんな鼻かわからないから見てみたい」	＊幼児の声から次の活動へつなげていけるようにする。 ＊自分の思いや考えを話したり，友だちの思いや考えを聞くことで，さらに動物に対して興味・関心がもてるよう援助していく。
活動後図鑑コーナーにて ○図鑑でサルのページを開き 確認→納得 Ａ男：「人間サルだったんだよ～」 Ｔ男：「え～！！人間サルだったの？」 Ｙ男：「サルって人間みたいな手だよ」 Ｔ男：「本当だ！！」	○図鑑や絵本コーナーを設けたり，空き箱を多く用意したり等，環境構成を工夫する。
○図鑑でワニのページを開き （読み聞かせの中で，教師の疑問「何でワニの目って頭についているのかな？」を調べる仲良し３人組） 調べる→納得 Ｓ男：「敵が来るかな～って隠れているからじゃない？」 Ｒ男：「違うよ，川にもぐっているからだよ・・・」 Ｆ男：「あった！！見て！！獲物をとるためだ！！」 ３人そろって自慢げに教師へ伝えにきた。	

【検証結果】
意図的に遠足へ向けて話題提供をし，読み聞かせや学級の仲間との話し合いの場を設けたことで，動物の特徴について興味・関心を示し，気になった動物について友達と一緒に調べる姿が見られた。
このことから，学級での活動の中で教師が意図的に話題を提供したり図鑑コーナー等を設け環境構成の工夫をしたりすることで，動物に興味･関心が高まっていくことがわかった。

保育実践２

主な活動の流れ（表現 → 疑問 → 調べる → 納得 →伝える）

10月28日(金)　「リズム･ゲーム遊び」から

リズム遊び「できるかな」の中でゴリラの動きに疑問を感じたM子。

M子：「ゴリラはなんで胸をドンドンってたたくのかな？」
A男：「怒っているからさ～」
S男「いらいらしているわけさ～」
教師：「先生もわからないな～」
「図鑑にのっているかな？」となげかける。
すると！！活動終了後，疑問を解決しようと友だちと図鑑を広げ調べ始めた。
しばらくして，答えが分かったM子は喜んで教師や友だちへ知らせる姿が見られた。

【考察】
好奇心･探究心の芽生えを意識して意図的・計画的にリズム遊びを展開していったことで，リズム遊びの中からゴリラの動きに疑問をもった子が，学級の仲間とお互いの考えを伝え合ったり，図鑑で調べ合ったりする姿が見られた。

【次回への手立て】
今日の活動の中から幼児の声をひろい，次の活動へとつなげていくことができるよう援助を工夫していきたい。

保育実践３

主な活動の流れ（協力して描く → 考える → 疑問 → 想像）

10月31日(月)　グループでの製作活動から

グループで一つの作品（貼り絵）を製作するため，自分たちで相談し合いながら活動を進めていた。

それぞれのグループでの相談の結果，役割を分担し製作を開始！！
動物の特徴を出し合いながら絵を描くグループや，頭・体・足などパーツごとに描く人を交代するグループ，図鑑を見ながら描くグループなど，それぞれの工夫が見られた。
また，製作を進める中で動物への疑問が生まれ，お互いに知っている知識を伝え合ったり「○○じゃない？」など想像し合ったりする姿が見られた。

【考察】
グループで一つの作品を製作することで，動物の特徴について話し合ったり，図鑑を見ながら製作を進め合ったりする姿がみられた。また，「名前ってついているのかな？」「何食べるんだろう？」など，仲間と作業を進める中で話題が増え，さらに動物への興味･関心を高めていったのではないか。

【次回への手立て】
製作を進める中で出てきた疑問を当日確認することになった。動物園地図を活用し，当日の活動を工夫していきたい。

保育実践４

主な活動の流れ（相談し合う → 想像 → 期待）

11月1日(火)　明日の遠足へ向けて作戦会議から

地図を使用してのグループでの作戦会議では，スタートから順を追ってルートを確認する姿やグループで観察したい動物を１つ決める等話し合いを進めていた。

その中で，「S男は手をつないで歩いてあげよう！！」と，友だちを気遣う姿や，「コアラって死んじゃったんだよね。うーとーとーしよう」「ゾウの鼻のこと聞きたいから飼育員さんに質問したいんだけど・・・」などと，明日の遠足へ期待し，見通しをもつ姿が見られた。

【考察】
これまでの活動を通して動物への興味･関心が高まり，学級全体で動物園への遠足の目的意識をもつことができた。

【次回への手立て】
遠足当日は動物園の社会的役割の一つである「教育の場」を意識して，好奇心･探究心の芽生えを育むための援助の工夫をおこない，今後の保育効果を高めていける活動にしていきたい。

《事前活動　保育実践１～４を終えての保護者からの声》

「かーさん！キリンのくびのほねは　なんぼんでしょ～か？ブップゥ～×　なんと　ななほん！にんげんもおなじ　ななほんなんだよ～♪」
「あ～K男もキリンみたいにくびがながくなればいいのに～」と先週から動物に関する話し，園での活動を楽しそうに報告してくれています。
以前“こどもの国”に行った時の事を思い出しながら動物達に会えるのを楽しみにしている様ですよ。きっと家族で行った時とは違う目線で動物達を観察する事ができるはず・・・。「興味・関心を持ち遠足へ期待を」みんなで取り組んだ色んな活動が，きっと子ども達の心の中に残る思い出の遠足にしてくれるでしょうネ！
キリンの首の骨は７本・・・親の私も勉強になりました　ありがとうございます！

子どもたちの発言からどんどん話を展開していく方法はとてもいいと思います。
子どもも帰ってきてからよく遠足の話をしますよ。
動物に関するクイズを夕食時に自分で考えてよく出してきます。答え合わせの時に幼稚園で得た知識でいろいろ教えてくれます。

○お母さん！！動物について一緒に調べてみたいんだけどぉ～何か本ある？って興味・意欲共にすごくて生き生きして楽しそう。
○遠足ではグループのリーダーさんになったよ。って誇らしげな姿に成長を感じました。
○降園後，顔を合わせたとたんキリンの首の骨クイズを！！
（クイズの答えに）びっくり顔で・・・すごくない？ねぇ～すごいねぇ・・・って。

「M子たち遠足があるよ～」「こどもの国に行くんだよ～」と連日のように嬉しそうに報告しています。
「キリンの首の骨は何本かわかる？」「人間の首の骨は何本？」と質問され，家族は誰も正解できませんでした！！そのたびに答えを得意気に教えていましたよ。
「動物園に行ったら動物の体の特徴や手足の違いも見てきてね」とか「１番好きな動物は？」などと，家族みんなで動物の話題で盛り上がっていますよ。

「お母さんキリンの首の骨の数って７本なんだよ！！しかも人間もいっしょだぜ」とドヤ顔（笑）！？
今度の遠足はひと味違ったものになりそうですね。

【保護者の声からの考察】
幼稚園教育は環境に教育的意図を盛り込み，幼児がその環境とかかわる遊びを通して学ぶ教育であることから，今回の遠足は行事の教育的意義を明確にして，教師の意図的・計画的な環境構成を通して事前の活動を進めてきた。
これまでの遠足は保護者にとって娯楽という意識が強く，みんなで動物を見て弁当を食べて終了というイメージがあった。しかし，保護者の声（下線部参照）にもあるように，今回の保育実践１～４の取り組みを通して，幼児の動物への興味・関心が高まっていったことが読み取れる。
また，教師の一方的な計画ではなく，幼児の声から次回の活動を計画する（幼児の知りたい，聞きたい，という気持ちを大事にしながら教師が意図的に働きかける）方法で活動を進めてきたことが，さらに動物園への遠足に対する期待や動物に対する興味・関心を高めることにつながったと考えられる。

保育実践５（仮説の検証）

保育指導案

(1) 活動名　遠足へ行こう

(2) ねらい　動物園への遠足を通して，本物に触れたり，見たりする中で，動物への興味・関心を広げる。

(3) 活動設定の理由

幼稚園教育要領「環境」で「幼児が自然と出会い，感動するような体験は，自然に対する畏敬の念，親しみ，愛情などを育てるばかりでなく，科学的な見方や考え方の芽生えを培う上で基礎となるものである。」と述べられている。

このことから，ただ単に環境の中にあるものを利用するだけではなく，そこで気付いたり，発見したりしようとする環境にかかわる態度を育てることが大切であると考える。

そこで，幼児が実物の動物を目にすることができ，小動物と触れ合うことができる「沖縄こどもの国」への秋の遠足を通して，本物に触れたり，見たりする中で，思い描いていたものと実物とを一致させたり，友だちと感情を共有することで，さらに動物への興味･関心を広げるなど感動体験を味わわせたい。

さらに，今後の園生活の中での好奇心や探究心の芽生えを期待し，本活動を設定した。

① 幼児の実態

○園庭の樹木や虫に興味･関心をもち遊びの中でそれらにかかわる子，新聞記事，テレビ，絵本や図鑑などを通して，沖縄の動物(絶滅危惧種)や小動物に興味・関心をもっている子，好きな動物の絵を描いたり，粘土や空き箱で動物を製作したりする子などの姿が見られる。

○学級でのひとときの時間を利用しての小学校への散歩を楽しみにしている子が多く，小学校の飼育小屋で小動物を見て喜ぶ姿が見られたり，小学校校庭の植物や雨上がり後の大きな水たまりに興味・関心を示し，それらの環境にかかわる姿が見られる。

○学級での活動の中で，図鑑や絵本の読み聞かせやリズム遊び，ゲームや製作などを通して，動物に興味・関心をもち，動物なぞなぞを考えたり，図鑑を見ながら空き箱で動物を製作したり，友だちと一緒に図鑑を見て動物の特徴を調べるなど，動物園への遠足に期待をもち生活を進めている。

② 教材観

動物園への遠足を通して，幼児は実際にものを見聞きし，触れ合うことで，それがイメージとして内在し，先行経験としていきてくることになる。したがって，幼稚園では，幼児が経験できない活動や，経験の偏りが生じやすい活動を園外で体験させることが必要となる。その意味で，自然に恵まれた動物園への遠足は，自然の事象への興味や関心をもつようになる共通経験となる。また，このことは，遠足が新しい活動への導入や，学級全体またはグループでの活動（遊び）への導入としての意味をもつことになる教材だと考える。

③ 指導観

安全で楽しい雰囲気の中，幼児が主体的に活動を進めることができるよう援助し，幼児の発見や驚きに共感しながら動物に興味･関心がもてるよう働きかけたい。

活動後の振り返りでは，本時の活動での幼児の思いを聞き，気づいたこと，わかったこと，感じたこと，考えたこと等を共有できるような場にしたい。振り返りを通して，次回の保育や環境を再構成することができるのではないかと考える。

(4) 本時の展開

保育指導案	
平成23年11月2日（水）　うるま市立中原幼稚園　男児15名　女児13名　計28名	
前日の幼児の姿	・空を見上げ「よーし，てるてる坊主を作ろう」と，友達と一緒にてるてる坊主を作り，「晴れますように」と祈る姿が見られた。 ・遠足の地図を見ながら「コアラの所についたらウートートーしようね」「並んでから歩いた方がいいんじゃない」等と，グループの友達と一緒に確認しながら明日の遠足へ期待をしている。 ・動物図鑑を広げ，「ワニは卵から生まれるのかな」「この歯はだれのかな」等と，友達と一緒に会話を楽しみながら，いろいろな動物の身体に関心を示している。
ねらい	・動物園への遠足を通して，本物に触れたり，見たりする中で，動物への興味・関心を広げる。 ・集団行動の決まりを守り，友達を思いやる気持ちをもつ。

<活動仮説>
・動物園への遠足を通して，これまでの活動で得た情報と，実際の動物との出会いの体験がつながることで喜びを感じ，さらに興味･関心を広げることによって，好奇心や探究心の芽生えがはぐくまれていくであろう。

時間	☆環境構成	○予想される幼児の活動	◎教師の援助
8：15	《教室》 教師 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○登園する ・挨拶をする ・所持品の始末をする	◎朝の出会いを大切にし，挨拶を交わしながら今日の健康状態を把握する。 ◎遠足を期待している幼児の気持ちを受け止める。
		○きらきらタイムに参加する。	◎今日１日の活動に期待を持ち，見通しを持って行動できるように１日の流れを説明する。
8：45		○遠足へ行く準備をする。	◎事前にトイレを済ませ水分補給をし，遠足に出発できるよう声をかける。
	《バス》	○遠足へ出発	◎安全に目的地まで到着できるよう，バス内でのマナーを確認する。
9：30	《動物園》 ☆準備する物 ・動物園地図	○動物園巡り開始 (グループで地図を見ながら巡る) ・動物を観察する ・飼育員に質問をする ・調べたこと，分かったことを地図へ記入する。	◎幼児の発見や驚きに共感しながら，興味・関心を広げていけるよう働きかけていく。 ◎動物の特徴に気づけるよう働きかけていく。 ◎園内巡りが十分楽しめるよう，安全面には十分配慮する。 ◎友だちと考えが違ってトラブルになった場合は、相手の意見をよく聞き，自分の思いを伝えられるように援助する。 ◎各グループの地図のチェックポイントを確認しながら，園内の自然環境にも関心がもてるよう援助する。 ◎自分達の目的に向かって協力し活動している姿を大切にする。
11:00		○弁当をいただく	◎楽しい雰囲気の中で弁当がいただけるよう配慮する。 ◎食後の片付けでは，公共施設でのマナーを知らせ，一緒に片付けをする。
12:30	《幼稚園》	○園へ戻る（到着） ○降園前のひととき	◎遠足の感想を話し合ったり，教師の気づいたこと、感動したこと等を話し，次の活動へとつなげる。 ◎忘れ物がないか確認し，安全に気を付けて帰るように声かけをする。
13:00		○降園する	
評価	・いろいろな動物に興味・関心をもち，その特徴に気づけるような援助ができていたか。 ・友達と協力しながら活動を進めていく中で，好奇心や探究心の芽生えをはぐくんでいけるような援助ができていたか。 ・日々の保育と関連させた活動をおこなうことができていたか。	

(5) 動物園巡りでの幼児のつぶやき

ゾウにとても興味がある仲良し２人組！！
ゾウをじっくり観察中・・・

観察して知ったこと，気付いたことを地図へ記入中・・・

沖縄の絶滅危惧種パネルの前で・・・

図６　実物を前に五感で動物の実際を感じとる

(6) 遠足後の幼児の感想

・キリンの首はやっぱり長かった
・モルモットの毛がふわふわだった
・猫（カラカル）がヤンキーだった
・ワニの目が上にあってすごいと思った
・マンドリルの顔がきれいだった
・動物を見れて嬉しかった
・ヘビの目が怖かった
・亀の背中が固かった
・ライオンの目が怖かった
・ヘビの模様がすごかった
・動物にありがとうって言えた
・シカの鳴き声がかわいかった
・ライオンの模様がすごかった
・ヒヨコがふわふわだった
・ゾウの鼻の中は筋肉って知ってびっくりした
・コアラにうーとーとーできたからよかった
・キリンの模様がすごいな～と思った
・カメは草を食べるってわかってよかった
・飼育員さんに質問するときどきどきした
・シカが大ジャンプしてすごかった
・ゾウのウンチがころころで元気ってわかった
・カンガルーの赤ちゃんが袋にいてすごいと思った
・鳥が一本足で立っていた。動かなかったから心配だった
・マンドリルがおやま座りをしていたからびっくりした
・コウモリの鼻がブタみたいだったからおもしろかった
・マンドリルのお尻を見て、虹色みたいだったから不思議だな～と思った
・ヤンバルクイナの写真はあったけどケナガネズミの写真はなかった（絶滅危惧種のパネルを見て）

(7) 保護者から見た遠足後の幼児の変容（保護者の声より）

・これまでは祖母の家で飼っている犬に近寄ることはなかったんですが，遠足後，犬に近寄り肉球や歯を確かめてる姿をみてびっくりしました。
・家で飼っている犬を遠足前はただ「かわいい，かわいい」って抱っこしていただけなのに，遠足後は，しっぽをじっ～と見ていたり，どうなっているのかな？と触って確かめたりして，分かったことを家族に報告していました。
・動物に関するニュースや動物関連のテレビ番組に関心を示すようになって，興味深く見るようになったり，また，見たことの感想を家族に伝えたりするようになっています。
・家族で「こどもの国」へ行って来ました。本人がはりきって遠足の時と同じルートで案内してくれました。以前訪れた時と違い，動物を観察したり，気付いたことを話したり，幼稚園で得た情報を家族に伝えたりしながらの「こどもの国」巡りに，子どもの成長を感じました。

(8) 考察

実際に動物に触れることで，温かさや愛おしさを感じている子，疑問に思ったことを飼育員に声をかけ確かめる子，飼育員がいなくて質問できないときには友だちと自分たちの目で見て確認する子，これまでの活動から得た情報を引き出し自分の思いを友だちへ伝える子など，幼児一人一人が，目的を持って動物園巡りに参加している様子が伺えた。

よって今回の動物園への遠足は，日々の保育と関連させた活動をおこなわせたことにより，好奇心・探究心の芽生えをはぐくむきっかけになったと思われる。

また，グループでの動物園巡りとしたことで，他の幼児や教師などと感動を共有したり，動物園探検マップを活用し共にその対象に関わって活動を展開したことによって好奇心が広げられ，高められていったと思われる。

今後は，今日の経験を次の活動へと生かすことができるよう，一人一人の幼児のなかに今何を育てたいのか，どのような経験を必要としているのかを明確にして，教師としての願いを環境のなかに盛り込み，環境構成や援助を工夫していきたい。

Ⅶ 幼児の変容

保育実践１～６（検証保育）を終えての幼児の身近な自然への気づき，興味・関心の変容を，園生活での観察で調査した。

≪園生活で見られた好奇心・探究心の芽生え１≫

朝の仕事での出来事より・・・
割ってみよう！！（疑問→考え合う→工夫（協力）→発見→納得）

朝の仕事で落ち葉拾いをしている時にモモタマナの実を見つけたＡ子。
教師へ「先生，コウモリが食べたモモタマナの実見つけたよ」と報告してきた。
教師の周りには学級の仲間が数名いる。

教師：「本当だ！コウモリに食べられているね。モモタマナの種は食べないんだね。」
Ａ子：「種の中って何か入っているのかな？どんなふうになっているのかな」
Ｍ子：「う～ん・・・何にも入ってないんじゃない」
Ｔ男：「固いから何か入っているよ。たぶん黒いもの」
Ｒ子：「もう１個中に種が入っているんじゃない」
Ｔ男：「じゃあ割ってみよう！！」

その他数名の仲間とともに，種割りが始まった
種を投げる　→　種を地面にこする　→　石で叩く→　どれもうまくいかず・・・。

Ｔ男：「のこぎりで切ったら」
Ａ子：「小さい種だからのこぎりで切ったら危ないよ」
Ｒ子：「わかった！！釘打つときに使う物・・・大工さんが使うさ～」
Ｓ男：「かなづちだろ」
Ａ子：「先生～かなづち貸して下さい」
（教師へかなづちを使い何をするのか説明をし，かなづちを借りることができたＡ子）

「早く見たいな～」「ぜったい黒いのが入っているよ」と，それぞれの思いを話しながらかなづちを使い叩くこと数回・・・種が割れ「やった～」と歓声があがった。

Ａ子：「なにか入っている～！！」
Ｔ男：「あれ？ピーナツみたいなのが入っている。黒じゃなかった・・・。」
Ｍ子：「白いのが入っているよ」
Ｒ子：「粉みたいだね」
Ａ子：「初めて種の中見た！！」
Ｓ男：「おれも！！」
Ａ子：「Ｕ子さ～ん見て見て！！
モモタマナの種割ったよ～　みてごら～ん！！」
（近くにいる仲良しのＵ子に知らせたくてＵ子を呼ぶ）
Ｔ男：「Ｆ男にも教えてこよ～っと」と，喜んで駆けだしていった。

降園前のひとときの時間に他の子へも報告し，実際に割った種を提示した。

【考察】

本実践をおこなう前までは，朝の仕事や遊びの中で，「先生モモタマナの葉っぱが赤くなってきているよ。」「先生モモタマナの葉っぱがたくさん落ちているよ」「今日はモモタマナの実いっぱい落ちているよ」等と報告する姿が見られた。

今回はコウモリが食べた後の実に興味を示し，実の中がどうなっているのかを不思議に思い、友だちと協力して実の中を確かめることができた。

１０月におこなった学級でのコウモリ探検遊びや，秋の遠足でのこうもり調べ等，これまでの経験や環境との出会いが幼児の心を大きく揺さぶり，疑問→考え合う→工夫（協力）→発見→納得する活動に結びつき，好奇心や探究心の芽生えにつながったと思われる。

≪園生活で見られた好奇心・探究心の芽生え２≫

「園生活で見られた好奇心・探究心の芽生え１」の経験から疑問に思ったことを友だちと協力して探究する楽しさを知りさらに遊びが発展していった。

朝のひとときでの情報より刺激を受けて・・・

担任が見学をしてきた「沖縄工業高等専門学校」「沖縄科学技術大学院大学」について，朝のひとときの時間に報告した。

すると，「行ってみたいな～」「いろいろなこと研究してみたいな～」「珊瑚とかも研究できるの？」「大きくなったらそこの学校へ行く！！」と，興味を示す子が多かった。その後遊びの中で・・・

T男：「そういえば前からやってみたいことがあったんだけど、やってみていい？」
教師：「どんなこと？」
T男：「葉っぱを石でつぶしたらどうなるのかなってやってみたかった！！」
教師：「すごい！！ほんとどうなるんだろうね。T男は前からやってみたかったんだね。花壇の所でやってみたら？」（友だちの目に付く場所を提案した。）
教師：「幼稚園には色々な葉っぱがあるよね。どんな葉っぱを使うの？」
T男：「細い物とか，まるっこいものとか，色々な葉っぱ」
教師：「わくわくするね。頑張ってね。」
（子どもの発想や考え，試行錯誤を見守ったり支えたりできるよう幼児に寄り添う）

さっそく葉っぱと石を用意し石をすりつぶし始めた･･･。
そのうち，友だちも興味を示し男児数人が一緒に遊びに加わる。
その中に，友だちとの関わりが弱く室内遊びに偏り，物事にあまり興味・関心を示さなかったS男がいる。

S男：「先生～見て～実験しているんだよ！！T男と一緒に実験しているんだよすごいでしょ！！」
教師：「どんな実験しているの？」
S男：「石で葉っぱつぶしたらどんなふうになるか調べているわけ」
教師：「すごいね！！実験だね。ところで，なにか発見した？」
S男：「うん！！葉っぱつぶしたら，わさびみたいになるんだよ。おもしろいでしょ！！わさび屋さんだよ～実験って楽しいね！！」

他の幼児も、「先生見て見て！！」と自分で発見したことを報告してきた。

報告①「枯れている葉っぱでもやってみたんだけどできなかった。細かくなるだけだよ」
報告②「葉っぱつぶして触ったらぬるぬるするよ」
報告③「この石の中って白色なんだよ。葉っぱつぶしていたら、石も削れて中がみえた！！」
報告④「つぶしてないときは、あんまり匂いしないけど、つぶしたら苦い匂いがするよ」
報告⑤「モモタマナの実もすりすりしてみたら、茶色から緑色になって手がむちむちするよ。」

片付けの時間になり・・・
「先生、もっと実験したいから石どこに置いておけばいい？」「次は他の葉っぱでもやってみたい」と、次回への期待をもって今日の実験は終了した。

次回の活動の手立て

【環境構成】
＊幼児の思いに応えながら，試行錯誤できる場所の確保をしたり，用具や材料を取り出しやすいようにテーブルを準備したり，草花図鑑を用意したりしながら，環境を整える。
＊学級でのひとときの時間などで今日の出来事を振り返り，共感し認めていく場をつくる。
＊園庭巡りをおこない草木の名前や種類などを知らせていく。

【援助】
＊幼児の思いや柔軟な発想を受け止めながら，思いを出し合える雰囲気をつくり，幼児に寄り添い見守ったり，時には一緒に活動を楽しんだりする。
＊一人一人の思いを十分読み取り，その子なりの表現を認めていく。
＊気づいたり，発見したりしたことに共感できるような言葉かけをする。

後日・・・「あいぼうけんきゅうじょ」設立

幼児の中から看板を作りたいという声があがり，材料を準備すると，友だちと協力して看板を作りあげ，葉っぱ遊びの場所には「あいぼうけんきゅうじょ」と書かれた看板が立てられた。

また，徐々に遊びに加わる人数も増え，園庭や小学校校庭を巡り植物探しを始め，シークヮーサー・桜・ジャガイモ・ガジマル・バラ・・・など，たくさんの種類の葉っぱをすりつぶし，確かめ，比べる姿が見られた。

その中で、すりつぶした葉っぱを使い「この葉っぱ何の葉っぱかわかる？」「ヒントは匂いをしてみて」とクイズを出したり，確かめたことを手作りノートに記録したり，園庭を巡り「この木はおばあちゃんの家にある木と似ている」「この葉っぱはちょっと固いね」と，友だちと互いに感じたことを話しながら葉っぱ集めをするなど，身近な植物に興味･関心を示しながら遊びを進めている姿が見られた。

さらに遊びが発展・・・

これまで，色々な葉っぱをすりつぶし匂いや色を探究して，葉っぱ遊びに満足した女児数名が，園庭にあるミニハウスへ「くろーばーがくえん」と看板を貼り付け，食べられる葉っぱの研究をするという遊びを始めた。

毎朝ハウスの掃除から始まり，園庭に生えている草花を集め，図鑑を広げて調べる姿が見られた。

数日遊びを繰り返していくうちに，男児も仲間入りし，学級全体へと遊びが広がりつつある。

【考察】

「園生活で見られた好奇心・探究心の芽生え１」での経験と，朝のひとときでの情報が，幼児の心を揺さぶり，以前から取り組んでみたいと思っていた遊びに取り組むきっかけとなった。

遊びの中で「葉っぱをすりつぶすとどうなるんだろう？」と，疑問に思っていたことを調べたことで，「葉っぱはすりつぶすと苦い匂いがする」「葉っぱをつぶして触ったらぬるぬるする」など，発見や気付きに出会うことができた。

また，園内の植物に興味･関心を示し，「テイキンザクラ」「タマスダレ」等，植物の名前を覚えたり，登園途中で見つけた草花や栽培園の栽培物の葉にも興味を示すなど，身近な植物へ興味・関心を示す姿が見られた。

遊びの中で興味を示し集まってきた友だちとすぐに共通理解し，遊びを進めることができたことや友だちと一緒に時間をかけて同じ対象や活動にこだわり，工夫を重ねていったことが，わかり合う喜びを味わい「もっとこうしたら」「次は・・・」と探究し調べる活動に結びついたと思われる。

このことから，秋の遠足を通しての仲間との活動経験や学級でのひとときの時間での教師の意図的･計画的な環境構成や援助によって，積極的に物事にかかわり，好奇心や探究心がはぐくまれていくことがわかった。

≪園生活で見られた好奇心・探究心の芽生え３≫

これまで学級の仲間と取り組んできた活動から劇遊びへ

主な活動の流れ（興味･感心→調べる→気づき→伝える→発展）

学級でのひとときの中での様々な情報発信により，環境問題や沖縄の絶滅機具種に興味・関心をもつようになった幼児は，動物園の遠足をきっかけに，さらに動物に興味･関心を示すようになり，教師や友だちへ新聞やテレビで得た情報を伝えるようになっていた。

＊環境の再構成

遠足後学級の動物図鑑コーナーには，沖縄の生き物図鑑や環境図鑑等を増やし，絵本や図鑑を精選していった。また，自然や動物に対する子ども達のつぶやきをひろい，学級の仲間へと広げていった。

＊これまでの学級での取り組みや動物園への遠足をきっかけに・・・

動物園の遠足をきっかけに，さらに動物に興味･関心を持つようになった幼児は，以前から気にかけていたヤンバルクイナや地球環境について，お父さん･お母さんにも知らせたいという思いが募り，劇作りへと発展し生活発表会で披露することになった。

劇を作っていく中で，内容についてみんなで何度も話し合ったり，ヤンバルクイナや珊瑚について図鑑や絵本から情報を集めたりと，積極的に劇作りに参加していた。

また，「牛乳パックのリサイクルや，栽培活動，地域の清掃活動など実際におこなっている活動をセリフの中に取り入れよう」「セリフを方言にしよう」「英語の手遊びも入れよう」などと，これまで学級で取り組んできた活動を劇に取り入れたいという幼児の声を拾い上げ，出来上がっていったオリジナル劇は満足する内容に仕上がった。

＊積極的な練習風景にびっくり！！

登園してくるとすぐに劇遊びが始まり，それぞれ好きな登場人物になり劇遊びを楽しんでいた。また，発表会が近付くにつれ，登場人物の仲間同士で声を掛け合い積極的に練習したり，消極的なＭ子やＥ子も無理なく楽しそうに練習に参加したりなど，学級全体がお互いの気持ちを確かめ合いながら一つの事に向かって楽しんでいる姿が見られた。

（練習時間の終了がきても「もっとやりたい！！」「たくさんの人に知らせたいからもっと大きな声を出す練習したい！！」と，やる気満々の子どもたちに担任が困ったことも・・・）

＊大成功！！

発表会当日はもちろん大成功！！

「もっとやりたかった」「たのしかった」「どきどきしたけどおもしろかった」「泣いているお母さんがいたよ！！感動したんだよね」などと，達成感を味わい大満足の子どもたち！！

保護者の方々からも「劇の内容に感動しました」「堂々と演技をしている姿に目頭が熱くなりました」などと，子ども達の成長を喜ぶ声が聞かれた。

また，「新聞に興味をもつようになって，家ではよく新聞を見ていますよ」「気付いたら新聞記事を自分のノートに写したりしていて，家族みんなびっくりです！！」などという声も聞かれた。

＊その後・・・

自分の興味のある新聞記事を切り抜き，それにコメントを付け加えてのオリジナル新聞作りや空き箱・空き容器を使用しての動物作り，また，チラシなどでマイバッグ作りを楽しんだりする姿が見られた。

そこで，さらに遊びが発展するように，素材を増やしたり，教室内の環境を整えたりと，環境構成を工夫していったことで，お店屋さんごっこへと遊びが発展し，「新聞屋さん」「ペットショップ」などと次々店を開店させて遊びを展開していく姿が見られた。

【考察】

これまでの朝のひとときでの情報発信や遠足までの事前活動，さらに当日の活動が幼児の心を揺さぶり，劇作りへ取り組むきっかけとなったのではないか。

また，遠足後も引き続き動物や植物，環境に関する図鑑や絵本コーナーを教室内に設けたり，幼児のつぶやきや行動を読み取り，必要な情報を発信し日常の保育と関連させて活動をおこなったことにより，お店屋さんごっこへと遊びが発展していったのではないと考える。

このことから，情報発信後の幼児の姿をとらえ，幼児がいたるところで見いだしている気付きやつぶやき，語りかけを教師がしっかりと受け止め，もっと気付くように刺激をすることが好奇心・探究心をはぐくむために大切だとわかった。

Ⅷ 成果・課題・対応策

1 成果

(1) 行事の持つ意義と，学級の子の育ち，それぞれの課題や集団の課題をふまえ，日々の幼児の興味や関心をとらえ，意図的・計画的に環境を構成し学級活動を展開していったことで，動物園への遠足という行事が保育効果を高める活動になった。

(2) 遠足までの計画的な事前活動を通して，当日実際の動物と出会ったとき，「あっ，知ってる」「やっぱりそうだ！！」と，喜び，共感し，納得したことが楽しさにつながった。その経験から，その後遊びの中で，周りの環境への「気付き」から好奇心がくすぐられ，自分から「触れる」「探す」「調べる」などの姿が見られるようになった。

(3) 遠足当日の目的意識をもった活動により，一人の発見をお互いに確かめ合ったり，観察を一緒にしたりなど集団として行動する中で，共通の体験ができたことから，普段消極的な幼児も集団へ参加し，遠足後共通のイメージを持ち遊びや活動を共有する姿が見られるようになった。

(4) 日々の学級での活動の中で，幼児の興味・関心に即した情報を意図的に発信したり，活動を取り入れたりしたことで，動物や自然，環境問題などに興味・関心が高まり，「みんなでやってみたい意欲」が生まれ，学級の仲間との劇作りや，遊びの中で身近な自然に目を向け探究する姿が見られた。

2 課題

(1) 幼児の内面理解を深める観察の仕方やつぶやき等の記録の工夫

(2) 好奇心や探究心を深める環境構成のさらなる工夫

3 対応策

(1) 幼児が自己発揮しながら仲間といろいろな経験を重ね，仲間としての育ち合いができるよう，それぞれの遊びの場面で観察の視点を明確にし，付箋紙等を活用して記録の工夫をしていく。

(2) 疑問や不思議を深める援助を心がけ，幼児の好奇心・探究心を持続させ，その時期に大切な育ちができるような意図的・計画的な環境構成と援助をさらに工夫していく。

＜参考文献＞

西久保礼造	１９９７	『保育実践用語辞典』	ぎょうせい
秋田喜代美	２０００	『教師のさまざまな役割』	チャイルド本社
無藤隆編著	２０００	『幼児期にふさわしい知的発達』	チャイルド本社
文部科学省	平成２０年	『幼稚園教育要領解説』	フレーベル館
無藤隆	２０１１	『これからの幼児教育を考える』	Ｂｅｎｅｓｓｅ